伊地知文庫
文庫20
360
30

文庫20
360
30

扶桑拾葉集巻第二十七

目録

泯江入楚序　源通勝
巧枕　同
贈左大臣義晴公追悼之辞　藤原為久
贈太政大臣信長公追悼之辞　同
准后道澄とゝのめる和歌序
左勝院とゝのめる辞　藤原信尹
同

東求院淮后と申ける辞　同
藤原元信と云ける辞　同
うゝ紀　茂原肅
夕顔巻辞　同
代賀光明挽辞　同
興賀古宗隆辞　同
又　同
恕仙法師追悼の辞　同
陽光院二十三回御忌追善の辞　真言法親王

後陽成天皇升遐の記　手時慶
或部卿宮仁親王追悼の和歌序　好仁親王

扶桑拾葉集巻第二十七

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

内閣文庫

泯江入楚序

源通勝

夫光源氏物語は、いかなる人のしたまへる物ぞとて、世
にあまたある中に、既に百年を六十年はかりに成る去る
比のことなり。その、うみ、人の口ずさみ、うたひ、うたまへ
ども、常に、去れども、注釋もなき故、及ばざる所、多
かりと、新しき、学者、専に、雅美を動かす
らんと、奥入と、岩清水と、紫式部と、
うんん、其後、螢宮、水原と、始出たる有と

八ちに、のぼりうちにうれしと思ふ事かぎりなし。只松島寺
のたたずまひの河海拾ひ、桃花坊の禅閤の花を餐結ばせ、
左府相国の要塞をたづね、うれしなどかぎりなきうち、宵柏光
人の手書と、寒花と名づけをきるうち、うれしなどかぎりなき
紙をとりそへ、七言三韻、かきくはへ、うれしとおもひ
うゝ、道遥禅府奥有と、つゝみ、うれしを見、祈岩三光
の二院、うちたづねて、皆をのれ流とくまんとのぶ。
柳岳永信卿源藤孝、壮年ちう文と尤も武士なる
ものを志とせり。清丹陽府君なる、合戦
うちはて、去ぬ。意解の織よりうつりて、識
若遊て永退、うちうれしと云。俗塵をぬけ出て出齋よ

屏居せる。うれしとその恵美を去ることを遠くなれよ。狂人荷
相国の幕下を辞せる事を、常よ海城の秋
吹海よりうつり、枕をなべて夜の雨の寺の事
いまゝ去ることうれしてうちとうれしと
よ似ぬう。波老人妻鴻の詩を見て、筑波の法を
ゆるすとい物語ら少よ。山相治はそのうちの人
合戦の事、去ることのいまゝの物語を、きうきる事
わるいうれし。古来の浦人と一流のものなり。去ることの
山へうちうちてあるとい。はるとれいと面とる
事の、去ることの海の塔の去ることをしの句をなく
事、ぞはうちよ月と遠く若ぬう。かの四をの話

[illegible]・頭より伸び合さる毒、赤子の如く愚
なる心迷い易くして、殺生を業とする所の[illegible]かとこう人事を顧み
ざるべし。三光院内府海法の折々、道の末に列なりて
再び和し奉るかとうたを、かつがつ伸びを伸ばし、[illegible]
もにてうたをもし、金かなこうたをもって、鎌倉より[illegible]て
かまくらへ、初つ[illegible]花を、風の音を聞かるるよりむしろ
花れのうへ、[illegible]記臘より[illegible]
成ぬ。[illegible]と[illegible]門のうたを[illegible]
みなれ[illegible]かの記事[illegible]
[illegible]。海鳴[illegible]の[illegible]
自ら[illegible]人の[illegible]。[illegible]て悔[illegible]かん事と知か

[illegible]かの[illegible]。花[illegible]こと元[illegible]て、年五帖よりなる
山谷先生詩よりなる。[illegible]初[illegible]。[illegible]乃[illegible]と彼
奥入に[illegible]。今は[illegible]乃楚
よ入[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
とのうへ[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
よ世乃[illegible]。[illegible]
海人[illegible]。[illegible]
あ[illegible]。[illegible]
か月乃中の九日。世乃[illegible]。[illegible]

て、蔵王堂とかいふをみる事一去る事

藤枕

同

元和庚申辛酉秋初月、或人、吾妻の旅より出羽へ入る。
もはらりかくれ住いらるるとて、我故に江戸へ出られ、いろいろ
うれひらるるとぞ。行くしも清水、飛瀑、三尺、行雲
殊勝、白露生ずる爽気、金風吹微涼、栗田口四宮會坂
関と称す。彼田の橋の畔より行かりし、飾蓋かぶる江戸
の人、よろめいらる。高野廻頻春驟雨、室来、湖水冷々
釣浪荒々、彼とい者の指かくるを見て、餘波
ひらるる夕暮の元禄哉。ゆるゆるとあるき、ゆるゆる濡て、蓑

笠も沈るるばかりなる。ゆるゆる、有老親有小子、いとなげ
き哀れ、ものも思て、今雪い夢覚まして、ゆるゆるとて、夜の
かり枕しぬ。京へ、ゆるゆる一封とうるはしきく、数行の帰と
届ける。

二日、江戸の人の、ゆうゆうと出る。西行、川の流れ、かくの如
別屋と盃の中よりもいとしき。皆人、こし江りり、うれしく行人
行き、今、帰人帰り、今、石部を過る。彼西行の、椿田川
水かをゆもりて、橋流行女、彼長明の、柳林の陰よりかくれ
ぞ、いと、山の月は、我しまるらかくて、早くとぬ、雪土
山、近麓の坂下、八十瀬の河辺、高瀬、山のうらうらと

打出浜に宮地紫式部の墓あり
三日晴夜雨荒て明朝窓うしいとなみ出よとうて四日
市に着よりて明日を立（立）て藤沢の路に袖をしぼる
今日を過ぎて桑名に付く途落日大然
四日七里の航風吹波荒て
うしよ明初る光れ氣色微風擺ふ霧の麗日泛浪
鑄に一帆如逐電舟楫若歴魂頃刻に熱田宮に着
る餉を食する程に神に賽と祈しに碧殿御
燈側に深樹中に春叩玉扉に鎖て秋霜底寂風物層
樓臺に入れ極絶天海に蓬萊遊仙の靈窟也
夕由くし心に懇祈とうて来方彩雲のきのみと
うけ給る中も惟故里の老母とのみ思て楚河未決
と怨ありし俳書かりもうしと空に紙袖の龍涙
せきつもりなん云ふ所也
秋ふかみ雲も都と立こらと
ものこの夜の月かたく日をかさね
五日鳴海池鯉翁矢仮居浜に至て夕暮しまき赤板に
はるかめ
六日夜雨降出て松の反崎に彩御池吉田二河潮
見坂に かりて晴雨濃に来て松籟雲に吉う横雲
埋荷路に滴滴沾襲袖にうるおう人とのわ
旅程萬里泥征鞍 破笠短蓑風雨寒

恨只被遮松霧色　人家咫尺見難着

志賀濱香の渡りと見なれし・遠の芦屋の海の風・藻屑搔焼く煙・磯辺遠みられる浪の音・いとゝ荒野の渡り毎

荒吹く風寒枝や・志賀の浦遠くゆかなて・濱松の葉の音

寒し

見わたせば松のうれ葉も色ふかい

み世の月をまちかねて

うらむれ人の濱なれし・今ゝ如くに風情佳矣・又

夜寒か

雨新志賀の濱の夏なれ

何しか吹かれ松の葉の

七日朝の間雲の多かりしよ・不時の山と見初めしかの山は

うるはしく・香くる雲間より峰出もり・狂彩赤き大城河

の流れ・ゆるき・色も天然かゝる・岩きへ松ふかしてて

四方の海・舟よのり・袋井・無何とて日暮れ

よりて泊る・初夏の夜

夏の夜の夏浦も涼しく如枕

何しか世の小夜の中山

思ひたちのかゝる雲の

岩根うるしく月と見んとは

八日富士山とうるはし・漢く白雲遠く山腰・天々八重擢

蒼穹にうるはしく江に入まて・山は友かて・少きうるはし枕

同質(シカタチ)よみ侍り。大井川を渡るとて

なをもふるい名のみ侍りを大井川
世はわたる身の名ぬらるる世せ
身とうるる世骨とおもひ侍るる

はのうかるる道をとのうる

最暗き山路とうるは。草の露の紅葉もり〳〵安乱者。被
よ。寒の秋風ふかるては。露夜間とのもかるる。俤行者
ふいはのうる者。我ら学先ゑて。ひとりの人の如の風
あいね。夢ゆ人ゑ心細かるしよ。うれしも歌〳〵
見ゑ者。ねるしも馬上の紙筆なるし。かとうる者〳〵言の
葉のしたをうるきれし憑君。傳語ゑと。夢なるあ

山の若よいるるうたるよいのいみとを。京の人よも数三年安
之〳〵なるて。紙多ゑ。ふ。
九日江尻ゑう清見寺よかる。山地の風京丹青も及
ゑ〳〵。前よい碧海渺〳〵漫天色の後青峰層〳〵
圓釣郷。岩寺の水之拍ゆうて。風の吉し耳清し三穂
海よゑ面浪い。東の松山すしゑ〳〵
〳〵者。自路者ゑ見渡さい。小さ海ゆ一ゆ二ゆ。巷の
雲間よ遠ゑ見ゆ。たしゑ過〳〵ゑ。ゑ者。数多く
加て見花。由井乃海辺と行ハ。湖汲蓮。白水郎ゑ。
浪ゆし。ゑるる紀者の無(サ)いとまるゑ。ゑ者ゑ。
うて。呼聲(ツリアフ)合ゑ。ゑいと長浜(ナガハマ)。明月し来て見まし。

田子乃浦と見遣ハ、雪烏衛續ハ東宮徴白くう、我も他も
しらぬ人々、芦のまき宿まてなれ一夜とかきつ
袖ぬれぬまに竹編る庵と聞て、何となく海つらなる
もの人ハ東船西船消息言ハ、只長浦秋月白浪に、又は
思浪面、かうりなく遠しまするか、何か哀しの都やら
かくれ浪のあやと、皆くうちもみさ夢みる枕しをぬらし、
又なしきしく胡うてお
十日富士乃ふもとの船ゆくして、吉原浮鳴原とるんハ青
天雲霧万仞士峯、只在掌握中、要遮瓊奇之景
象、不可勝計、凡富士ノ為山也、干駿、千甲、千豆、蒼峻巌
而業峨崔嵂峯崋、磨毛千岑、攢萬岫、絶頂分為八稜、

積雪不断、常無熱悩、雖雨乾檀特、東震泰嵩、不可
相左右、中央嶮峒、唅呀霊湫、澎湃霧、扇其一縷気
升霄間、且挙且騫、誠に希代之壮観也、昔年孝
安皇帝ノ時、一夜之間ニ東南ニ出雲霧俄起、地
表半数百里なりしか、夜の間に此山涌起湧出と云、
白衣の天女絶巓に跡を無く、氷雪疾疫いまれは應か
と申侍り、裾野乃原に馬の口とられ御

又

射天八葉幾千里　雄鎮東方仙女蹤
空劫已来堆積雪　扶桑削出玉芙蓉
愛見士峯風景鏡　暫如羽化得逍遥

平原澤水數千尺　天上雪煙洗未消

三嶋の明神は大通智勝佛の應化なり。佛天より
くだり。利生方便の風芳く。更に新者の益の多き觀
彼久遠猶如今日とこそ覺ぬる
十日まで明神なり箱根山に攀躋し遠望をしし
こし山路をわけ入て見つ。去ぬる
かたがたにみかくれの先達なる有て。枕ゆ仮の夢
問ばしいらうしとそのこゝろ頃の疲をも忘れ
盃持て。夜宴をなしかしこまれる
明ぬるこゝろみ重なる山に分入
ゆくをのりの人のかりけるへも

十二日ともよ伊波をくだりて必ずしてそこに海道
まてくだりて遠州に出る。今日は天竜の大橋に
とりて。例の老若男女出あつまる
故郷よりのうしろ
いとをしかりしまくこゝろ
十三日に江府に到る。今は風俗漢の唐の大
宗よりも国をうたへしとなん。流源家平家いらかを
ならべて翌日二品親王の後に隨い大樹に
御座を拝し。自朝至暮まて猿楽奏曲とし
きりに御恵のみ甘き。又仮の人と問あり。拙西波西凡
思ひて。三十日にかりそめ。神無月時雨もあり

一夜あけぬるうらの藤枕
いうてきくらの少将と見うつん

贈左大臣義時公とゝきめられ侍

藤原前久

天文十七せいのまつ八のうつ世のみだれそなあ。洛のあ
江のわうつ。あわうつ。ちかうみの陣ろうれぬるうつ
わうて。九重のうちあれ。浪風乃吉をいやうかれ定し
ろ。大樹まつ坂中（御座をうりうれむとの意。細川
右京大夫晴元。佐々木左京大夫義賢浮是也。六月廿
七日ねをとうの也。敵ちかうせ。小泉河の河うう
よて。進發山城寺奥法花寺。その夜い慈照寺

よ上ゆう法華寺。西そうの波や志賀かとなとも慈照
かくて日ゆうゆ。世中ゆ。ゆ。世中ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
く。細川右京大夫晴元。佐々木淳西小獅芝粉屋よ
きゆ。まつ東山慈照寺のうよ。城郭とかまへうよ。
うゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
く。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
う。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
小雪山ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
御藥のゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
紹流御藥ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

せ・こゝ法御藥をいらゝ後ゝ[illegible]
あまりぬきはらう・御脉つゝはちらいて大事なる
らゝ・あゝたゝかうゝ仕ると・[illegible]時分
てはとゝいもをもうちせゝし後ゝと・いまは御よい
ゝをせつゝかうゝし見あてまつる・きゝ御ゝ[illegible]
まゝ四せゝ・又ゝなる醫者ゝしゝをもし野部ゝ仕る
御ゝ・祐常三位をもゝ[illegible]
ゝうゝ後ゝ[illegible]仕て・御脉ゝ[illegible]
のゝをらしゝう・かゝゝうゝ[illegible]
仕ゝうゝらけゝしゝ・ゝゝ後ゝしのゝゝなる四ゝお
まゝて・元日ゝ[illegible]御對面ゝ[illegible]

ゝ後ゝゝいのゝ四ゝ[illegible]て・[illegible]物ゝ[illegible]
ゝ四ゝ・ゝゝつゝ四日のゝ後ゝ[illegible]
後ゝゝと・四ゝを仕ゝ[illegible]
ゝゝ後ゝゝ養生仕ゝゝゝ[illegible]
後ゝゝし・ゝゝ後ゝゝ[illegible]
ゝ醫者ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝし・御ゝ・ゝゝ後ゝ藥ゝ[illegible]
ゝゝ後ゝゝし・醫師ゝ[illegible]
ゝ宮大輔明英・上池院紹胤評定ゝ[illegible]
ゝゝ・ゝの藥定ゝて・又ゝ[illegible]
いらゝ後ゝ後ゝ[illegible]御ゝ[illegible]

袖ちらかまへてきるまじき。うはぎとなりしのちも給ふ。
御服のちり侍るをりは。あまたかしこくしてむさかなしく
取られ御衣も洗事と作くきせあまへ。まつ大神宮と
くし渋毒也。大小の神祇に衣とうけあまは。みしめ縄
をすへしなめの腫気と定め給へし。御祭書などは
其の教つとめし字。かく仏神に其のめとしるあ。御代実
申うてれ人へには。まかしこに是限なし申す。聖護
院准后。七ヶ月護摩あうせあ明るあまし。又山上の
大峰には。渡るある日とのへまんきとしめし修業て。温座
の護摩ときい。かうあかし日ごとに謹まかし。清元宮和
般若なくにし。渡れのうへししとくにありて。御あかて物

りまゐりあそし。津のくにあまのはし字。四ヶ大寺をのほかの寺
こそ読するにもかなし。このあまいふしあんとくし
たぬ人へかなまつりせるまじき。かりしふかうぬ
らのし。みかまりの集て。読るには数をたふに御物かゝると
志あい。ちる要の読しもおろもとしてこきゝ志あまます
かうり給うら城山の半ありてい。別の事ありにし。わ
へし衰法うらぬこそし。御滝落の分てほかにまつるを
給ておぼしめしたまへる。御祈のうへまでし。かたうりの
らまことにおきをきせ給ける。かゝる夜御夢にうちの
る世のうれへてやかくの草伊力かの世にいひとう後て
思ん。むのか古歌せしとかなしく山浪をたのうち。なお

江戸へやりし所江戸へやると。御前へ参る人々に江戸
かゝる事を申しけるに。されば江戸なりとて人々にいひきかせ
まうしけるに。様に見え侍りしに。慈照院殿の御詠歌也。紀
よくなる事にや。又結城左衛門尉国家が書れし作
事抄を読まれ侍るらし。江戸に見えしことども定
かゝりける絵事。左衛門尉が、こなた四よ世々と世に伝はる
えまし人也。方様へ入し城山作事のおもむき御事
なりけり。さる事。又山中まで御返答の事。是より七日
吉日なりとて。直に相勤進せし候。江戸へかの
うち程よき事、後を開に侍りては、其の比の給ひし
とらせしに。定栄胡后に届く様をめされけるよ

とし。御かしこまり給ひける御入洛の日なれば。元より
毎年の通り、御帰洛まで、こゝをも過給ひ、まつりごとゝ
申されけるを御わきまへ給はせ給ひ。御入洛の日は同じ七日と
面々申されけるに。廿六日御出船。あまりに心がかりなる
事に遠進されければ。晴天又延引の事を申されしかど
きこえける。既に勢の、ゆるゆると軍兵をしたがへて
御供申されける。江戸の事はいかにもと有けれど。又御入城の日
を御定めけり。御申されしと。其方にも其段御申しにて
ありて、御やすみ給ひ、御出船も遠からぬ事なれど。しばし。ある夜
峯相中納言殿。江戸よりましけると御覧じて。これ程には
りよしと申ことを相伝へし。今は心やすらかにて某

申しとゞめ給ひし事もなかりし。今度つゐに思月子
ましませ。清水寺よりくは浅ましきつかへ申して。まな
ともし給ひし物を。内の人々もあはれがりけるとて、
なさけしきさまにて。御いとまも出来。御遊のはじめ
その月の御所の御事ども。うつしはらゐ侍す。かくさ
うしはいかなり。能この御事はかりのみ。かくあとりて御養
生しけるて。なほつかさくなりしとなんまうし。元来
しかの給ひし出は、おもくなりけるて。御入道の事て
かなし、花をそて。はまことしはなやかに。見給ひとまうて
らむ花をめしめし侍るよ。何事もかくせんせうか
と。御神代にやうにまして、さ給ひて。御前にまかり
らぬ人々みなかくまうで給へり。さて卯月はまことの事の族。
参もとりなりくしめりまいりてやせ給ひしゐりて。
脈をつくしきゝし侍りし。上池院まいり参る。つきの日をうつし
しとゞめ給へと。すなはちおもかゝりて、巻数など
ほうかの比より御なやみかうりかゝれ御様体も又とまら
に侍らぬ御かうし。御心ひいはしおかしきん。主城の人々とせう
し免せも何うそえなん。やうそ内侍房よせ給ふ御もちゐ
やくもらよりうち。御立て上野民部大輔信孝、三淵掃部
以清貞久、飯川山城守信賢まいり、御まいり給ひて。但馬守
とゞ侍るらしゐて。伊勢守貞孝ハいきくらはか
たゆりける。なほまいり侍らじ人々なほ家ゐは、いかる道

しらん。大殿左馬代時光、摂津寺元遠相戸の五城の
人々すねと免して出家よりこれを出家しわすれ
いとうしけれたりまわる。今水奥のたとい法師
奉ぜれちゝうんとうちうとして、城中らいけいもまゝ
出家兼再奥あんこと。草のれうけうそれ安い和尚
とくへうこ半なりとうとの法へと。由うたうと人々今
神と去ゆうて由そめ。うぬくよかうもいかりゝ言の
業とうふまうらなむ。かくのもまいゝ元いかたとへと。
うたうらゝかし当用文豆。就病度左子義号武王側
王台太石望四。長當伝天下と人学。かゝし用の廿八百年
れきゆうらうとをとうたゝ。神りゝ出産のゆうゝ。

我かくなりぬそしられしゝうとうたうか。御らし法み
もちて世中の半とと。かうとうを知もまゝ人ゝ法をうたる
なりと。の法ゝ半なとと。ゝうと集て。まれとへとうかゝ
きわきなりう。出由みかかれしいとものけうそ由う
うかい法しと人ゝ人ゝ。文月三日帝釋寺之忍海とて。
いとものゝ法老法の月うゝ法りゝ。まはの法ゝの
半とゝ。極重悪人無他方便と。十念し一念し
無かゝ半の学。念仏よ者くはかゝ。ゝくとせ
法へとものかれ法法念まゝて。ゝくつうもまと
見て。者ゝ法りうゝ法うゝかゝゝ実法て。
言教ゝ念仏しゝ法。ゆうかゝ半ゆう。ゝ者ゝ由

らずかなしく、見る人も人なみくの夜の夢かなりて、袖を
ぬらし侍りぬるを、なかなかに、かなしき我かな、皆昼夜のごとく
になりてはあはれなるもの人ごとにはかなけれは、みな
夜の夢のやうなれは、わきておもひのあはれなる人の
あはれは、蜀魂なきて、いとゞかなしくなる折ふし、いと
神のみもとに申しけるは、かゝる人もいくらかなし
はかなきつゆのみのはかなさは、屋風にゆらるゝやうな
露のうちの物なりとてはと申す、せめてはなれもやらす
みなしはるゝとて、御前へ申して見るもてまつりぬ。
細川右馬頭・時賢・同播磨守元常とうち続きて
そのほかの人〳〵これもしられて申しまつりぬ

ありし世を久しくおもひしは、かなしきなれば、やはり夢と見
みても、はかなきことゝいひても、ゆめのうちにも、我
海のうしほ、花の色を、すまじ、あはれなるかな。
世の春の花の色は、はかなく、秋の木の葉は
風を待つ、人を雲の上のうちにも、草の露の
泡とこそ、なかなか我ほとけに逢ふ事もあれ、一切有為法
如夢幻泡影・如露亦如電・応作如是観と、きく
につましく、おもいしらしめて、あはれかなしき、六字の名号は
ふかくとて、津の国の郡のおとゝ
申せるかたはしありしまゝ
歌
なにはの人のあはれなる

ゆくゑはさためんまほろしもかな

む　むへまくらなれてなそらへし君なるのか

ち　うかりしかりねにかさねわひしき
　　何事て世のちそれからむ恋しさと

　　おもひしらせて姫の神のまし

み　うしは今年のうた世のならひをば
　　なとのみ思ひねはらきなるらん

女　女のもなにもやさしいつしか君の
　　こしをはつりとしあかし世の中

姫　姫君すなわち世後ところ人のうへと
　　きみいのられぬさてもわひしさ

おなし年とは、かくれ給ひし木の君とあらそひま
侍るなる一し、ちかくなれ侍りし由侍り。さて又はき
かるもくはまて、二条殿しわよの花みて、この御かたり
なれ侍りしよ思ひ人はなれらむし、相国寺にて、藤原
新僧正の申し由ありて、かの御かたと物に入まつり
て、七日より慈照寺にうつし奉る。東山に敵ちかき所
なそらへしる人はおかりなれと、いましの御かたは
まゐりても、此論語の事などの、御心にかなひしき人よし
申さられ給はして、古今の事をものならば御
入路
かくれ物をもとよりて、さんし山にそなえり。この程御
なりとて、心そかりたるとしかなしきにつけてもかなしき

うへ・ゆうこうの和尚あり・あるとき・鹿
苑寺にうつされたもせうの・奉公の人々・みな所なる
ものかり・ゆうこうとともに・いまの見てまうしそ
富田のつかひの・ものをみて・御うしろ・ちつ
きとあてなしかるべし・鹿苑院も・ひとあるい
漢経かりてよみたもう・沙弥中
うこの中に・定利殿より・はかり・進義岳殿寺奥信
うの間あり・いかめしうこうくはる中に・ちつて・神
者ともしらしめしかり・山城守奥信・前の都鄙み
あるかりうの事なる・おのおのに・立ちのうちを
らして・忠利あるいかりこの世のおのおのにて・文かゆを

かこと申しけるとて・今しかるべきいとなる・細川右京大
夫・秀興寺殿・そのほかあるべきを・ひとつ
ちかしいかるとおぼえて・このわいあい大納言大将あて
おりて・ゆうこうきみとあるかの・一所奏聞を贈
しせられる・平少納言・宣命を沙寺・そもゆかり・わか
らしられかし・いかもかうこうに沙使の・ものこまかの
ものに中なる・かつて・おのおのかうこうの・ゆうい
もかの・ものとうこうの・ゆうい・かつて・御殿のれうと・ひとつ
かの・ものをせられる・ひとつ・そして鹿苑院・ゆうこうる・麻の苑
鬱のうちの・ものうこうや・世と・ものとよりかの・ものに
みかしとひとつのものうはいとうこうはいとうこうをとて・ひとつて

畑さまれしとかしをかけりしと又申さるゝらし有けり。定内に
れ給ひ也とかれらの人々にはそなへなしぬ。大舘
左衛門佐晴光・摂津守元造朝臣・三淵掃部頭晴員・井上
越中守定秀・松田丹後守晴秀などいふ古家入道とて
かん。日うちへて出ほなりぬれは、慈照寺にもとり
給ひけるに、御とゝめ申されけるよし、いかにも儀式
ありけり。五山僧衆以下とりあへて、この時也とも
よおほしめしけるに、御ものは御庭にさふらひて
起居とて、佛事のつとめに、ほれとかくて、其の
けるとよとやけて、かくうち葬送して、ゐちる火
のようにて、なれ申すきいのつかふれし。かれはさなは也

らう津こ侍る人々の中に、荒牧とられて、清大居士
奉御をもくるしき事にて、あやしみなおしの汝時もかはつるか
こりは侍らし。佐々木左京大夫義賢は、深く御愁傷して、今よそ
ありては、敵東山へよりて、さきに侍らんのうちに東京より注
進ありて、せめきてはかなはす、一儀のへ
ありける事は不思議にて、江州南北の諸勢・社
かくて世の中の物には、さらに御いのちもまさにと申
うけをなしたまへと、ゆかしさはかり給ひけり
御の御ゆへ覚はしく、揆廣の御いはねかはさに
花のちり侍りぬるに、いつとなくちらかしては、よく去かれ
かるむれちかんとかし、御世の御はら御名代とも。

まゐらせし十才ばかりとみゆる、御馬にのりてはしりさりぬ
月毛にて、むかしより勝てきこえし、伊勢二郎左衛門尉貞清
をめされて、ものゝかたちを見れば、是はゆるしなきを
侍ることにて、ねがはくは御方へ御返し給はん人に
神にちかひてかへし侍りしや、こはいかに又は鞍馬山へ返さるゝ
人にもあらぬ有様ならば、須のことをそへてこれ書き
事かなしきをよみて

うつ蝉のこの世のかりと思ふ身も
いかにしかなる雲に見えけるや

贈太政大臣信長公ばかりにてよめる辞

同

天正十とせばかりの夏の比、われもいろいろかはりし世のみだれ出来て
前右大臣平信長公、ほどなくうせ給ひぬ。されば御かな
しさにしも、思ひ侍りぬ事の口をしさに、出家して源
の御わかれしかば、念仏し御菩提をと弔ひ有けるに、人の
心のうちかなしくもまことに有べきことにしあらねば
へとなしくまち、徳川三河守源家康とも同じくあつまりて
送り給ふ家の御かなしさに、みなひとしく二月にてそれよりあかつき
つきまれ涙をながしてよめる歌、七日精進と法事の事
正親禅寺の僧ども同じくかなしびて、法華経讃嘆の
にも、かの宝名を百万遍と唱ふる神なりて、則ち学
の名を聞しめしてみまかりて奇ととなみ、ねをもとめ返へし

[illegible]
吟の門に有るかな。念仏のこゝろ如と云まゝ。ゆゑ
〳〵なれども八句を分ち。かの八宗諸経のこゝろ。法法
実相と云要文を。句のかゝらるゝ

か　かなしき人の法を信ずるなれば
涙かゝるゆゑ神をうのしば
む　ものまゝなれば人の情のみ
かなしう法をゆゑ者をいとふ
あ　ものを者ゆゑ者をいとふ
ま　まつ先ゆゑ法をふかめ
み　みかくの義をゆゑ信ず

こ　こゝろ〳〵人の心ゆゑこの
さ　さしもふかゝるゆゑなれば
ゆ　ゆくとしてゆゑを表と
ふ　ふしぎ思いわくて去ぬ分や
わ　わの身なるゆゑなれば
惟后通盛を伴こめる和哥序

藤原信尹

遊又悲母のゝこゝろみを。散層とゝふとのたまへり。ゆゑ
の〳〵とは。年かゝる今更かなしき。或ゆゑ
とゝ申ゝ。ゝ。或ゝ。ゝ。或山のこゝろ
ゝ申ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。微妙のゝ

めされし文字の数、筆額の島の渚によせてつくす
出まし半ばに、照高院准后道澄公の近きにありしを、筑
波山の家集の表紙のまと、つくしかつ紀恩徳なりしと、西
らせ給まうりしほどに、左賀茂川のかけになりしとかいふかたに、日かけ
岸東嶺の照らしてうつりしかなたを見まする所に、
れこ有るまゝ、再頃の三段の下らるゝにいそやゝ、法皇
志紙しきへの所の、面々の筆跡どもよりて、若鷲
の奇術とにかくしする事しあり。風水のてらかしく
弁は五十年かりかうことせられし、年中十中年
うつしくて殊字えしかなりし海まで、こなつみな月の
なきての給ふ。志ありて、なか又まかせ給ふ法ありに、益

思の御所に居住し侍し、比而子童男大士のなか
うしら、園城三院の大徳まで、柔和の衣をきて、慈尋
のけきるよりと捕かし、浮泛なきもおほしまかせて、天に向ふき
地に伏し、志ありしいかなしいはゝしかなしく、法ありとおほしかなき
月のゝ法儀の八日に、雙林のかたをしきかしめへしいるを
人の足の神に、三井の寺にて字ばかりそこそ一年なり
又いちふ前の池ちか、青蓮のうてなの縁かなりし、入定に
月もらせ、其八正法部し、歌詠し、法如来と供養し
奉り、菩霊に志をしくる事志なり

序

大元年かくてゆりけ四月九日也

蓮のうてなの記をうへぬる

方便

思わずして教いまの五乗をはじむるの法の時いまだ至らず

譬喩

子とうばの親を捨てかの子をもとめしがごとし

信解

長者が家を捨てて親をわれ

貧窮なるこころをもて古郷

薬草

おのづから其花を見つれば世の人の

花とうばを思ひとむるが如し

授記

世尊の法王たるこの名まことに蓮華

文字のごとくなるわけとえらむ

化城

三宝野のわたるべきいそみち

のりのけうや古の道とかうきをし

五百品

人ををしへうたはば善くのりきを記

仏しるべ世を去給をれ

人記

釈尊の教を受て
末の世の世に今らせる

法師

是を御法の花の業
今の世の人の事

寶塔

乳母を始め
宝の塔法の花

提婆

前の世の師として今法のため

[illegible]

初持

釈尊の教をしたがへて末の世
法の花ちらせのうて

安楽行

末を思ひて
[illegible]

涌出

[illegible]
いうて法の水のうるおひ

壽量

塵のうを清ぶぬらしの意なり
佛とおしる法をしるべし

分別

あらくうの思ひわかるかたち
うしるうの法と法とは

隨喜功德

十とうて五なる作うて作
人をうるて法いきのうち

法師功德

法師ら咲あり生あり
六の根きしる法の花ゆを

不輕

はつらむいう毎の法人
やうきとつて作る者い

如來神力

末ならを動めとそのうち
方ら動ゆ法を仏同し

囑累

神々法師をつて身とわを
りしきしを仏同をうとわ

藥王

如法はつめの法を者をかる

うけぬる法のうへ
妙音
[illegible]
[illegible]
観音
日の光わうぬ[illegible]
[illegible]
陀羅尼
法のうれきを[illegible]
世[illegible]
歳王

如来の世[illegible]
むとう川入[illegible]
普賢
[illegible]ぬる法の[illegible]
[illegible]
太陽院[illegible]辞

同

天正の年号・寅なりける年の夏の[illegible]・太陽院殿い
と、いつ[illegible]
[illegible]
[illegible]

文月かの三日の朝の夜ふけ、[illegible]
[illegible]月[illegible]年[illegible]、光明院殿[illegible]
う、八[illegible]彼風の夏[illegible]
書の[illegible]人[illegible]
[illegible]東求院殿、歌[illegible]菩提[illegible]
[illegible]、七夕の涼[illegible]、河の[illegible]
[illegible]

つ市、[illegible]ぬ

か　かくかの[illegible]やはしの[illegible]
　　[illegible]ぬ[illegible]見てなはは
つ　[illegible]

を　佛[illegible]
　　せのくらやなの[illegible]
　　[illegible]
く　雲[illegible]
　　[illegible]
は　[illegible]
　　かの[illegible]
た　[illegible]
　　[illegible]
い　[illegible]
　　[illegible]七夕と
　　[illegible]

東求院准后といひける辞

同

東求院殿出家とせらる秘は六とせばかりみちまし、起居
不安にしてはやのこともしらで御いのりさへなりしを、
からに別の秘もちかきいまし、わといひまうさも半まで
何かし、時は深こてかへいるいたかへためにしかりし
熱悩のこと穏よしてほ佛よし八日と結要として女
まへ安、何しら法のよみをけしらむとしよむかしむ、
神咒かと唱へ侍るに南無のよ、奇乃为のからに
要文と云へ壇上よりまゐる、其文應無所住而
生其心

に　にしむかひなげくるいのち大元帥
の請けをぬる山風吹きた

う　うきせみのからになきその声はよせむ
君をば呼ぶとそへとふる

む　むなしきいきかへらぬ人と生れ
むつかしかへるる親のめぐみて

せ　瀬となりしふち水に沈みて衣
ふかき深淵となるらむ

よ　世のうきにつくし今からめぐらむの
別よのみせありまさりける

ち　ちかせぬる國あまはる七十ばか

七夕祭の歌

うゑ初年ゆうぎみの上をかしこみ
みぬ年をいとはぬ別かなうれ
に　よしとやいふうの顔みしられて
あま雲のみをこうへとはなる
去　去るうゑかのとふみとふかとれ
るあいはぬ為ものとして
や　ゆかりよさ七のうれとる暮し
神のうちるみ物をこの物
う　うはをそうはくみもいの物ぬる間
みる夢もかは夢とおもへて

こ　おもをさしぬ青面の雲の月ぬる
　　烟のうそとみなるきも
し　去るの山遠こさいへのうはへて
　　うるはいはもとに道を有る
い　むりの道とうるの月ぬるて月の
　　うるもかこはなるみをうん

藤原元清とうるめる辞

同

荒木志摩守元清は、生国播州なり。性ものしい
し戦場よりとしむく時は、退退軌則とみきた。我体
ゆとる時は、謀計籌畧よりかうそなかりしと、

終ふに毫儀の人も、真志を仰ぎ、そいねうとせるとゝ
ん、をれうあいを良うエとはうし、禅門よ入あい道
林う仏をしとはさて、駑馬得人の君とえあ、かゝ
さうるや豪気の人とゝ、穏歳よ病悩くはらし
をて、ゆるをしるかきなかとをてよ由を、志をし
不踰能と云よ、をもをうし薮賓の寄雲よ、をと
しくかゝ半とはさうゝ、多載ふるしめか
ゝ、若陽とくかう移い、楮尾よ素懐とゝのうた
半志うう

志をうるか引弱のゝうをゝ
由を為て人の志をかる世

かやくに

かやくさの藩よかるるゝ、ゝのをうかよ、ゆの浮
巣のあるふいとかみゝ、ゝのとかしとはうるあ
なて、かくゆつしさ身にしあるかをゝ、ゝう
をて人の隣と志ん志めしか、ゆをゆをゆらしあ地
う、ゝ成ゝあるの数ゝるかゝ、はよつをかるん、
於高の君うまつをこゝゝのいぬ、牛のあ
をかをとゝ礼、馬かあぬゆをしかゝらんい、ゆよ
わいしかゝをゆをしゝのるうゆ、由んをかて
ゆまゝ人をゝかをとをうをゝえゝかを、う

茂原肅

を茂の袋と、こうこうゝゝ如みなん清くまかく、かりの家
おし、瓶子門のせまかりかりこれ葉のとを忘れ、
かつ見くかりこそ、ひのしもこる庭のかれい、東極のと
とり花やの池とかせ、都のうちれ物ゐこし、ひのかし
めらつとやいみそかりこんとこうこ、せめてれこ清
明りあいひりこう松のまこと所一り載とゝ清、行
谷のきをみをりりむうい行う、今ゐまかりこ契を
ひきをしかくめう、をはうひゆをこうふをれこに
のこ

春宮にのくむ物をひ行て見しかく
むとむりきに載こめりこ少

ゆきこうこ松の哥

分とかくををすかりこひかくま
かりしまみ春きに庭の松 この家

とのみたのむ物こう、月をかこ、ゐ行をこ、
ひきゐ、こうかりい、ちりこうひやきこを月ひ
りり、葉わけをくこる物かう、こう清せこ月ゐ
あい、うれきゝ山のをかこ行をこうきかて、ゐりこ
くうれ、ひい、ひとうこのをみかかゝ物かんこ、かゐ
行きこかゐ月ゐ物けかこ、ひりまりのかをこうゐて
こかかりか、むこうきこれゐる竹乃枝よりねに新とみ
こりの古のをこをに、山のくまかくきみのかう、やこう

てうはらかうのしれい。四方より人きりまうぬしと。お来
うかうふ物のきこえはしまゆふ。かひよりのをと。
ほのぼのあけゆくかとかし。月はるの物みゆかうも。
おもかけを。ほのぼのとうちながめたるうちに
ゆふ。ゆふやきこえ。こゑ聞さかる。ゆをてこ物
をまのきるよりはるかに。ゆをたかい物ぬ。ゆけゆく
まやゆふ人きりまいうあはやゆふまり。立湖の濤ゆ。
三更の枕とあうしもかよゆふ。夏たに
きこゆる。四絃をきゆ。ゆふ。ゆふ。こゑをのうちなを
はるみゆ。物とものをはるふ夜のいしゆめぬふ。
かうのまを。桑の梶の物ゆきをうくゆるゆゆ。ゆき

おみふをいるくかきるゆ。うらはるゆ雲とゆ
ふ。ふ葉の風乃を。ゆをはるゆ。きをうしかてさも
くゆをるし。とのうゆくゆ。きをふしてをかはふ。ゆ
をとうをうすゆををかうふ。加ゆをうほうゆかうゆ物を
もゆをや。藤つのゆよ。長くうを物ゆ人をををうう
れをゆふ。ゆをうをうをを。ゆををけ
ををうをを。うをゆ。ゆをゆ。ゆをゆ。ゆをゆ。ゆをゆ。
うゆかて。人の志ゆをうををををををををををををを
ゆのゆるゆをををゆ。かゆをゆをゆ墨ゆ流ゆ。ゆをを
ゆをる志ゆのゆをゆて。命を聞ををゆ人ゆ。價
をゆをゆゆをゆゆをゆゆをゆゆをゆゆをゆゆをゆゆ

れたる山のせとのあるなり。ちはやふる神の
ゆるしなくば、かれをら志ぬべし。ゆゑ人とゝもに
ゆかんと、いと毋山すみの志らかいく、同しかをし
ゝ志のうるはしく、世のなをらぬ所なりて、かゆはり
ゝとゝいつゝ、ゆゝまれ新の山ゝる物、れかるれを
かゝこゝも思ふ世へあん、こゝてゆゝしと、世くゝ
かくゆゝて、をゝくゝとゝしきゝしのゝ、年いかへるゆゝ
芝島の色ゆゝ志ゝまゝゝて、日い志と言ゝ
ゆゝ、これ色い志ゝとゝ志ゝるゝて、こゝいもゝゆゝ
夏のこゝい、嶮嶮の風ゝ人わゝ志ぬゝ試ゆゝ身を
ゝゝゝ社の神ゝ、紅葉こゝ志ゝ、かゝみゝゝ、ゆゝも

れゝもゝんゝゝれゆゝをゝく、ゆゝゝゝまゝゝゆゝゝゝれぬ、飯山
ゝゝゝ

そ〜の数しらずまぎれ・うゑのうゑわきかゝ・むとと
さゝに志のいうきんと名づけ・ゆちやんとき〜ゝ梅と
きそほる・あらけとのこめ〜しゆるゝとて・つみゆる〜
あまたひとんせん

君うゑしゆ山乃田もせもゆせいほと
ふもしもそれちうあふかゆめ
みうるきけうきねんとなし名やし
名いかゝ〜てわゝはかいゆせ

夕顔巻稱

同

五條わうゝはゆきなると・かれ名のまゆ記きそ

白くらいきる花の若い・人のうゝしやとあるゝ
よ・いきやうそなるゆも志ゝはゆれと・ま
ゆ・ゆはゆとうゝ花と・いはくゝゆれゝうすやはとそ
あゝ〜ゆれとうゝ兎ゆれゝとゆ・かゝうゝ一けかゝうゝ
うゝゆゝ夕名れ花と〜ゝ・又そゝるゝとのれゆる
かゝのあふせ乃ゆせ・ゆはとゝるよ・その志きかゝふ
のゝいとゝ名ゝれと・ゆゝ名れの巻とゝ三文字を
ゝ記ゝ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ名ゝ名ゝ名ゝけ・ゆゝれゝ名ゝ
の名ゝえ・ゆゝ〜ゝ〜ゝ名ゝ記ゝうゝゆゝ・見ゆ世のゝて
きゆゆゆゝきゝかゝ・ゆゝゝ・ゆゝやゆゝ

いかれはいてしたゝをのうらとしてせもれをつゝみよ
その由をかゝらはべる
かみのやしろ　光こちまき学後の
花をくみきへ若きへかつうゝ
あゝはなすみの村の内の蕪山ゝはかみれ日の穫ゝ
しゝを後の村の由かゝ　そ　とうゝ後のかゝを
ゝを木れ若ゝかみかりうゝかぬゝは花をくすか
ゝゝ光ゝ花をいをかゝゝ花をこ花をと
ゝかんうゝ若ゝゝ由をかんゝ　そのをゝ
をはあて　ゝれ何人をゝをゝ光ゝれの
ゝを物ゝゝあのゝの　まれ書かゝし時　せの山

ゆまくをかゝなる

代賀豊州挽辭　同

大坂助なる学　溝口氏の長澄をゝれ国食
ゝ不ゝゝゝゝゝ位ゝ　ゝゝ
をゝるゝ由ゝ　生れの
脉莫ゝ　ゝゝ
きゝゝゝゝゝ信成学　ゝ
ゝ乃ゝゝ　ゝ
更と金蘭ゝゝめ　ゝ
ゝゝのゝ学ゝ乃三

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かたち形きまゝ成・歌にたゝへ人間うまれやすいん・何の時より
數傳の花の色しまし加や・山莊と志ゝ原の・徒人寺の
古の法を考ふ・て・志ほ〳〵冬こと世居〳〵・秀才の
立考・附〳〵に成世ちの・長うとゝ和と文の日數の
ちかゝれや・道の日きちの雪いと消て・人せ寄も
花かし文ようまし〳〵か・ゆ志ゝ世の者の花乃こ
むとう人きか法ちてゆ・長よきむ人はゝ文
つくえようねてゝう・物と真〳〵花とつゝや
日ちうん・かちうこなる和奇の加く物ちて
や〳〵花ちまこの意・縄のとゝかをうちゆ人道ゝ
の所歩花ちゝ日ゝ・ふゝ物〳〵世人の書日〳〵

り花いちんゝの若い・この日ちう日ゝ人の時ちも志と日
日ん日ゝと・そや今の人ちゝ人ゝ物〳〵ふゝきと
とのゝ志ちく・まゝいて志ちに・ゝ日ゝ日ゝ
し法ちて世みゆ加く・ちゝく仏ゝ加ゝ法ゝ
めるゝ・歌と花ちちん人ゝ世ゝ花ゝきゝ日ゝ日きちの
雲の人の・こちゝも強ゝ待ちと法ゝこて・ゝ成
花ちゝ花ちちゝ人ゝ・ゝ人世ちゝ花ゝ世
なる

人ゝ人ゝ人ゝ人の・法茅ちちせく
花ちゝ人ゝ世ゝ世世やゝ人ゝ
志ちゝ人ゝ人ゝ物と志ゝ実別

とゝせぬまりの中さしの来をやし

又

同

大和ものゝ神代の道い・しゆ〜たかやをとをよて・ゆのま
り初つゆの・天地と共もゆ清之まさしい・ゆゝはや
為無・わさくしゝ海ゆ清まぬるし・ゆゝ和奇の家と・
巫祝のうしかれ彩よ・ゆいて居るなて・ゆゝ為し
よの・ゆゝ居る世・道と共るゆゝ・ゆゝ世・桃花坊のれ
ゝしの・ゆいしゝ為や・ゆゝれの世・ゆゝて・ゆゝ家源のなゝ
れの・大仁の水のゆゝ為と言の業ゆゝ清世て・世の流
ゝは為れるゆゝ・所清ゝの師の師為ゝ・真世人まて

侍しゆ・ゆゝ世ゆて・ゆゝの家為為〜為清・ゆゝ家為
ゝ世ゆ捨人の道ゆ入為れと・ゆゝ為ゆ人ゆゝの世清世・
文為んゝゝゝて・世の為為為ゆ為ゆ・ゆゝ為世ゆ為
京極の先人清ゝ入来ゝ・父ゆゝゆ・ゆ為為為為
ゆゝゆゝ為れ世・ゆ為為為ゝ為れゝ・彼伯樂ゝ馬の三
世ゆ清ゝて世・鹿と為ゝ為ゝ為ゝて・ゆ為為為為
為ゝ・ゆゝ為世ゆ・世清ゝ人の岩根ゝ為
ゝ世・為ゆゝ為ゝ為為為為

かくなる事・哀みとゝむるに道しるべ・なみの車とゝ
ゝ・かゝの母とゝのゝをかんこのをまし・信濃路とは
すて山のよりゝ雪きる・月の多くゝみものをとく・いとせの
山の中を和りて・川のかゝしいとのかく・老ぬる者
しつむ船を・白河の水いかゝ
貴人たゝ・ものの市路をとて・ゝ紀伊のみ
ゝよ月を・思ひ出くゝ・ものかゝ
多田浦くゝ・河ね・ゝ・ゝ・八重の青
ゝ・かゝもせんとゝ・かゝ・八十限ゝ・ゝ
ゝとゝなゝ・ゝ・ゝ・ゝ
しゝゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ

ら衣よかゝらとやつゝて・信ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ

と・神代の風二きいはさらいて・民の業はそく
かるみちは・あらかをる〳〵こゝろのくらをしるかるんと・
このりてあものとしるしたらしとめ学・あるは柿本の由う
ち変みの・いろはるえるうたいとひ〳〵うこの源の心は
し〳〵万道者るはかるの人かんしるうかるる・考りくく
あれとはるこかうらて・心法者るかるとわたれ・常は
はるこのうたい〳〵は・かはたうかれあるれ為たく
面・動方はく物のかのみかは・如家見はまるかあう
らし・家雅の古はかなるかはくはるの者のうは・
時はたうしうめ地面とうはうれ・世の古学は
はをいのうたかるはくかなくきむのまう・波文うみめ

家はんやとをかしかと・はをくはるはたはたはたか
のうの・ふのみかのみうの世をしえのはて・世のうちはは
とうはう・うしくしくはたはうめ・如るやまする
うるかん

春

はるやまこのくと岩の学れ
ちうをかるの記るこわるん
岩戸のをしるめと玉の物をを
かるいまかはをけらん
花のとをまるくくはのくはは
いかしまして神風ふをを

夏

螢火のちらふ夜の月まと
とのうとのうやはらぬ中
はきの葉のちらいしあを祝きかる
人をちらへの月神代のみ哉

秋

白くちる原むうはきのみ
人をはなつく梅のくれ
かくるる神をさはうきむ月の
のちるくらはをくれ
秋の田の穂ふ八つ月をつ

はまのむうふものかうん

冬

神の代の雪の鳥のはきたはきて
おもをむうふくるのやま
柳葉よとくしも冬のはし
いまるのへ水たらはの

羇旅

ふこうくいをつのゆを発い
ちのはのはあまのくれ

恋

久うのはのの者くる色ふあて

[illegible]

述懷

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八十限ちかきやかりしかなくしてを

哀傷

[illegible]友だちの

[illegible]

賀

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

義白氏の詩に、月は人のまつまに、かたちを待つ。恩は
人と用ひもてゆく。習いにたがはじと、いくよをへわたる
今夜い、誰ゆゑんとかもつる。愛は恩仙法師の
三回忌の日、ちゝはゝいとうつくしく追悼の為めとて、
いとゆかしきこゝろと、父のみ命の上、葬儀のもとに成りぬ。
和尚のはとそのいとうつくしき調のおもかげをとゞ
待つて、蓋の車のもとにけ出でんかなを行まさるよ。
百日とあいしたうきあるよ、九原に帰まるやとて、
人毎に思ひ出でゝ、いとゝ思ひ出でゝもはかなしと
世にもあるべきもの、歌し、今夜の月の若き相の教へを、
いま十のみちびきを、彼岸通の法の記を考へて。

ちるこゝろのまゝ五つの人なんぞ、学を加へ、礼を加へ、
いとゝ加へ、うつくしくもあるかな。かゝるかなとて、悪
みとゝもを待ちて、今夜をとうとうの過ぎて
明けぬれば、去るこゝろの過ぎて、
毎日かけて、白氏の詩に、
ちゝはゝ成りぬ。麿の鐘
今百日の朝よりは成りぬ。眼をとゞめて思ひ記。
ねをいとの人、加へ人の去るあるを、何ぞ
時常よりこゝに成り、父の執とのみ見るべきに、
し今更ぬ、なりの森の
加へ人の森の郭に、

[illegible]

仏の御法の道を聞かせつつ三昔の和合は一極乃至
仏と申すべきなり

陽光院三十三回忌追善の辞

奥意法親王

文月下の十日、[illegible]日の八つ時、陽光院三十三回忌の
御わざとして、夏奈佐の寺にて、道場の荘
厳ひかうら華蔵世界とうつして、幡華鬘とを
わたし、沙羅の追風なつかしく、名香の
雲とくゆるかと、天人雲霞の姿をあらはし
く、庭の松風は糸竹をあらはして、音楽あたらし

く、生る仏の法門しかるべしかく
侍らん、金胎両部大日法身の悟の月をみがき、三部
諸尊のうつしを試みるらく、妄明業障の雲霧
とのぼうら消えせ侍らい、滅罪生善のこころをたて
かく申さん、ほうとそれ仏の道はたとへば、十善居士
伝よのかうあまたの世に沙門なりと、そのうちかく
くすれば侍らんなり、年月はかうとかかるみの間
いかうとき、[illegible]、顔回不幸にしたがひてうれて、
華太傅の、世はうかうせ志かうしあいのうきやう
のうちに、利養染衣の方をかしい、不断読経の功力をと
りて、善根と吊ひきいるあるよう記かうなかれ侍る

このなかに即身成仏の直道い、真言秘教の専ら宣
揚し給ふ則この文字と歌のうらみとをとて、清らかな
こゝろのとなりこのうみと、世の人の帰依をしわたし、九首の
詠歌とは、九品蓮臺よいまゝしめんとなり廻向

そ　そのむかしの清らかなる仏の御
く　いかしこきこゝろ神のつたへる教
え　雲の色しるきみとうるはしなるこゝ
わたるわたしのわたしをもまもり
思へこそ妹まちえるのうるはしき
こゝろの歌とわたしいのち清く

む　むせうなるみなくなるは何とそ
う　うるはしのこゝろのおしみまもや
ち　ちやはみなくなるはなくとむの言
や　やはるるこゝろのはるるなるこゝろを
ま　まもるこゝろのはるるなるこゝろを
け　けるこゝろの月うを
こ　こゝろの身いかをるるまもられ
え　えなるこゝろつとる年とかたく
て　てはるるこゝろ法とやしとのつうら
あ　あるこゝろとしかれとへかとや
さ　さるこゝろ世とかとなく三十のまう

こゝに殿のいもうとの御方

後陽成天皇御延乃記

平時慶

元和巳年、文月の末つかたより、上皇例の病ゆ
へ、ものしたまひしかとも、年ふる
夏の比なれとも、ひとつに物をも記、痰癖甚しく、
なを、針刺灸茶をもて湯をのみ、
たれのちはく、食かつ、痰おもく、食てゝ又はつかせ給ふ、
月のうちは大方食なる物、
なをしたまひ、新しき茶を
なをしたまひ、須又御唐の
ものをつくりて
なをしたまひ、おなじ
ものをつくりて

給ひ、法社寺等の祈法、
ものをつくりて、又わらうもの、
て、料のものをつくり、法眼伯安、法橋友甫、玄首座、隆
慶、本、立三日つゝ療、
法印玄朔、法印元鑑、蛛唐法印、玄仙法眼、玄田
つゝ、おもむき、卿、是玄朔曰、
給ひ、麻を珍よ、
しゝ、百草の献方、
俗、百気色、
みゝ、もうしゝ、
傷、

殿のこゝ
なを記、
痰、
大樹、
作、
毛、
日夜、玄仙、玄田、
作、
作、
ひ、
ひ、
痰、

[illegible]・深根国蕃[illegible]・癩疫[illegible]なる難治の
[illegible]・計[illegible]及[illegible]・[illegible]扇倉[illegible]
[illegible]大樹伏見[illegible]
[illegible]・[illegible]
[illegible]大方[illegible]女院[illegible]
[illegible]・[illegible]
[illegible]・[illegible]宮[illegible]
[illegible]下[illegible]・[illegible]
[illegible]書夜[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

面白くて、出家し、御位の物語
うもいとまつの花、法御口ずさみ、又出家し
の人々、何年あてもなく、なれ、めも津うを、法、出家
物語、うんとしらるる。今は何年し法師のん
身も色とものうつせ、法師。面有て、席の遠まて
還御のまる。出のとみて、御かるる有ふい、つの
世界の出世のまへなれりもの、こ面と法こ面ち
うに法師のと思れうやうしてやうのと、慈愛の
道徳のれ、さ身い、ゐとも絶し何ぬ物いの、その
そのら宮、遠流をちるつをる。合あこの志ろ
法師年、夫人の物とその物語も、何ろれい面きうぬ。

東御門少をし、出陽の宮まいて、たこ女を法師、未利
物語の出ぬ、何ぬ、又ぬ、物れ、なる
わこを法師、また、宮の出方遠し法面ろ法、出そ
物語、年の物、法、還御物、まる、宮遠し法とう
いぬ、さそ、志りうほと出何ろちとちる物
ぬ、下皮御は法師も出ぬ色とうい、まる、面
志ぬ、何まず法師ろ面まずやうかも、ちると
引入を法いぬ、出ぬ、年七歳の秋の後と、消法ん
ぬ男いちる年の出、上達部、殿上人ふまる
うちも物、志りみぬ、面、何まて出志ぬ、ぬ
出廣見引ぬて志ぬ、戸（ツボネ）熟居（ムモミシ）は兼和の出時こ

世、はかなかりしこと、なげかれつるに、
なほ、さすがに、もゝよりとしをかさね、
きせをはこぶぬんぢ、百ちをかさねて、
年をへこきせをはこぶ、ぬのとゝ、
ぬのゝ、せをぬきをはこぶ、今ゆきの
しよ、をうへ、はなうかくとの、
てはをはれ、礼の事は、日をうつして、
元の御ゆゑ、ゆゑ、はなはだ、僧慈、殊、
火かゝる、霧の法華経、漢の事は、
はをはじまりぬ、はをはじまりぬ、
なかりけり、日をに、ゆゑ、御院

号の日、法華経、仕出はて、
為、とゝのへ、祇園、院、
礼の日、供、奏、三條大納言、実、
光朝臣、受、右院中、
西園寺内大臣、実益、
資、流卿、冷泉中納言、為満卿、正親町三条中納言、実
有卿、西園寺中納言、公益、今出川中納言、宣季卿、下
官、四辻宰相中将、季継、阿野宰相中将、実顕、
清閑寺宰相、英房、中院宰相中将、通村、白河院
雅朝、水无瀬宰相、氏成、五辻右兵衛督、之仲、
時直朝臣、資秀朝臣、久脩朝臣、季吉朝臣、永慶

殺氏・為頼朝臣・孝治・為賢・親顕・時興・為通・通長・
泰重・ゑ有・奉仲・秀雄・真弟初位・重後朝臣・法成
人・ゆ車乃二行ゑ・院中常ゑ・ゆ車乃常ゑ・泉涌寺長老聖珍一人・僧ゑ・ゆ車乃
ゆ乃ゆ・大臣ゑ・ゆ卿・雲客一列ゑ供ゑ・竹杖ゑ・ゆ乃
見る人まて・ゆ乃ゆ・ゆ涌寺ゑ・ゆ色ゆ・
涅槃堂ゑ・ゆ車入ゑ・ゆ輿ゑ・泉涌寺ゑ・千花ゑ・堂
の上ゑ・涌泉の作法ゑ・ゆ乃ゆ・ゆ輿ゑ・ゆ
ちゑ・色ゆ・ゑ・吾平代・千度・ゆ・ゑ・葬場殿まて
乃ゆ・ゑ・東上南西ゑ・一列ゑ・僧ゑ・千度・ゆ火念涌泉
ゑ・燒ゑ・初仁和寺宮ゑ・大覚寺宮・妙法院宮・内府

ゑ・ゆ卿・ゆ乃ゆ・ゆ・夜ゑ・ゆ・ゑ・雲客ゑ・ゑ・ゑ・
ゑ・千度・ゆ輿ゑ・葬場殿の中ゑ・入ゑ・ゑ・ゑ・
燒ゑ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・燒雲ゑ・
ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・

う　うの川縁の山とおぼしき所をとゝ
かゝるに今い見物をうゝ
き　おぼしまの山よりかゝるくもを
六のちゆゝしゆゝしきうゝ
つ　ほとゝぎすなどつゝ
さのふしてきゝ音ゝの
ひをうちうちもしぶゝ音ゝ
為も知ぬうゝとう見ゝ
う　海山もゆのまゝゝにて日の新
まうでのゝ法のさまかゝん
廿四十九日の日わかを・般舟院にて・ゆゝしに詣て・和尚

筆うけたまはる・東ゝ方彩雲の中にも吾かゝるゆのうゝ
前事相氏成ゝ・ゆの　芳陳とかゝゝ家よ立て・五十首
ゆうみて・まうでうゝ・西ゝ・京三十二首と・如牛の
おゝよゆて・いゝ博ゝ・ゆゝ・ゆ中ゝ・試書て・御述筆懐
きるのみ・芝具ゝ芳成の山巡流し難側く・具は好
見の物とのこゝん中・演の山ゆゝ・おかうゝ
う　うゝ作ゝ・ゆ・ゝ・ゆ・ゝ・ゆ・

き

菊の花殺らるゝ頃もしたゝ
二月やよりし佛をうつみまま
思いそめぬるいせのうみのよ

の

のちの世を思いとたゝ絶えたる
みちとおもへ心のまゝん

む

むしきゝかゝる秋はさけい悪しさよ

た

うらゝに日数ふる秋のかな

た

たちまちもみぢ色なる燒の

の

雲のしのつる有明の月

の

野辺にたる竹のすゑ葉に露置て
うらなれ世にたえぬる

か

かなきにしのぶもむしの
夜かなこそ老の秋をあはれかな

く

くるまいの車の
玉民いのれ

ね

ねぶつ通ぶいるもしてゆ
秋のみかゝ河のよこをつて

の

のみかゝ清き蛍もあり
法の道いそそぐんやみぢて

あ

あ河まもみなもみぢ半しかぬ
のしと思ふかたやせの中

た

春秋の花いみうらよう作れと

なる人もなかりけるを奉りうし
例句ぬ行しも行なりて
と葉のもとのうつ
行ぬる方をとそかけし四枝よ
うるをは終を佛教の
紅葉と成てあうをかつし朝落の
久しき乃色と移ぬる
いつみきる月の約束成涙ぬし
う後よ遠うとゆのうもか
松をはうるかつみたく葉の
花ゆ後なくすりみる春

見る中とうたしと思いためるを
うれかふ爰とゆ留うけ爰
識まれし其の家の風まそも
吹たくへふやや思しい
うれ年をかうは月もの宮ぬ
れいうはをうを人なりて
へ海てなくうれやふみちるう
のうのれうとものまりめや
にあうれかふくんのやかのうよ
いうん無乃みやもなりん
かくうかとしたうもう世中み

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寄日長せしかせうまいしうい・ゆうと式めくみみかく
うて・清長山乃はきうめ逢よ入ぬるすとゑと・面
らわくらかと・せのういもかく成まて伝れい・必くさ
神一うとすと・拾と・かかくと水のうてうぬうをうう
いせんうとかく・ゑくかみ・ゑくかみくみうれ面うとみ・過行
月日しわくと・以くしう四十九日にめくう手ぬれくせ
めくく恵かる言の葉とたに・彼肆前のうかよ必・即
身成佛と言うくと寄のうらに出・九月試紙て・
りくの御わをれ・わ今歩くうをくとすう者うれ者
そ
せれ寅くのうかう・わいて
日伝物る神のなみくもか

く
行せしかすうにうみとみけくこの
踊よのこ歩くるうをの葉れ寄
む
者ていやくかれ嶋んかうくの
む
かううをくうふ山かくこた
む
ひうくらなかくと陽てうつ絵の
む
それ面新しうえやい見てきゑ
む
者くをを横しきみ別くこる
む
ゆうきくしうらぬ菱鴻の道
や
八重なすいくは文月ゑれ雲みを
ゆ
仏れやくくうくうれぬかけうと
う
う清くせとくわとい者つる神くし

愛とゝめうゝ〳〵爲こと
外てはこゝ起てゝ祈の〳〵雖もこの
おいうやなれ世の浮の生涯
つゝみ行かゝいきてゝ去ゝに
とゝゝ泡となけゝらめや

枝葉拾葉集第二十七終